

犬山の冬の風物詩

「たき火にあたるサル」について

昭和34年の伊勢湾台風でた倒木や家屋の残骸を旧犬山野猿公苑（1957～1997）で職員が暖をとるため焚き火をしたところ、少しずつサルが集まってきたことが始まりです。その後、冬の風物詩として「冬至」より、翌年の2月中下旬（暖冬などにより変動あり）まで毎年続けております。また、余禄としてサツマイモを焼き、サルたちに寒い冬の午後の一時を幸福に浸ってもらっています。おきで2時間以上かけて焼かれる「焼イモ」の味は格別のようなのです。

毎年、冬至の恒例行事として30件以上の取材もいただき、国内はもとより、イギリスBBCをはじめ、オーストラリアの政府観光局制作番組等、世界中で、珍しく、学術的にも貴重な現象として取材いただき、紹介されてきました。

海外ではニホンザルをミラクルモンキーと呼びます。これは北限のサル・スノーモンキー（青森県下北半島）温泉につかるサル（長野県地獄谷）イモを洗うサル（宮崎県幸島）とならんで焚き火にあたるサル（愛知県犬山）をミラクルモンキーとして紹介しています。

焚き火にあたるサルは、世界遺産の島、屋久島にのみ生息し、世界中で日本モンキーセンターのみで飼育展示される世界遺産のサル「ヤクニホンザル」138頭（雄66頭・雌72頭 内今年生まれ12頭）で、第13代ボスのヒトデ（25歳 今年就任）のもと平和に暮らしています。ニホンザルの亜種ですが、体格が2回りほど小さく全体にこじんまりとしたサルです。ニホンザルの仲間ですが好奇心が強く、石打ちや雪団子作り、アイススケートなど次々に新しいことを編み出したいへん貴重な種でもあります。

現地、屋久島では徐々に生息数が減りつつあり、急ぎ保護を必要とされています。日本モンキーセンターでは昭和32年以来、9世代がここ犬山に暮らし、多くの研究者の研究対象として、また観光資源として飼育を続けています。